

Title	アメリカ20世紀美術研究ニューヨーク近代美術館創設館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想を中心に
Author(s)	大坪, 健二
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49126
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	おお 大 つほ 坪 けん 健 し 二
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 1 4 7 2 号
学位授与年月日	平成 19 年 5 月 10 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	アメリカ 20 世紀美術研究 ニューヨーク近代美術館創設館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想を中心に
論文審査委員	(主査) 教授 上倉 庸敬 (副査) 教授 藤田 治彦 教授 園府寺 司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アメリカの現代美術とくに抽象表現主義の成立を軸に、20 世紀前半のニューヨークで誕生した「近代美術館 Museum of Modern Art, New York」の美術館活動に関係づけて、アメリカ現代美術史を再構成しようという試みである。A4 判横書、本文 170 頁に参考資料 11 頁を付して全 181 頁、400 字詰め原稿用紙ならば約 540 枚に換算できる。

構成は「序 アメリカ現代美術前史」、「第 I 部 ニューヨーク近代美術館設立館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想」、「第 II 部 アルフレッド・H・バール、Jr. とニューヨーク近代美術館コレクションの形成」、「第 III 部 アメリカ 20 世紀美術 歴史と作品」、「資料 アルフレッド・H・バール、Jr. 年譜」となっている。

ヨーロッパの近代美術 Modern Arts は、ようやく 20 世紀初頭になって、アメリカに紹介されはじめた。以後アメリカ美術は、伝統を墨守するナショナリズムと、ヨーロッパ近代美術の影響を受けたモダニズムが競合するなかで、さまざまな様相を展開する。1929 年創立のニューヨーク近代美術館 (MoMA) は当初から、ヨーロッパの近代美術を購入しては独自の美術観にしたがって展覧会を開催してきた。そこで呈示されたモダンアートの歴史は、アメリカ美術の主たる二つの潮流それぞれに、プラス・マイナスいずれとも考えられる微妙な影響をあたえてきた。MoMA の中心にいて大きな手腕を発揮したのが、創設時から館長をつとめたアルフレッド・H・バール・Jr. である。

バール・Jr. は、プリンストン大学在学中、歴史学者チャールズ・ルーファス・モーレイから中世史を学び、その研究方法を現代美術史に適用したと思われる。作品の蒐集および展覧会は、絵画・彫刻など狭義の美術のみならず、建築、デザイン、写真などといった分野に広がり、斬新な近代 (現代) 美術史を構築することになった。

アメリカ美術史上、特筆すべき MoMA の展覧会は、ともに 1936 年に開催された『キュビズムと抽象美術』展と『幻想芸術、ダダ、シュールレアリスム』展である。両展覧会をとおして、近代ヨーロッパの美術は、当時の 2 大アヴァンギャルド、抽象美術とシュールレアリスムに収斂するという歴史観が、アメリカでまた世界で、確固として受容されることになった。その結果、アメリカの最先端に立つ美術作家たちは、抽象美術とシュールレアリスムを二つながら対極に見据えて自己の活動を模索しはじめ、1945 年の第 2 次世界大戦後まもなく、アメリカ抽象表現主義という、個性に溢れた画期の芸術運動を生みだした。

MoMA およびバール・Jr. は抽象表現主義に対応できず、それを正しく評価することができなかつたと、これまでしばしば非難されてきたが、むしろ MoMA およびバール・Jr. の、それまでに類を見ない美術館活動がアメリカ抽象

表現主義を生んだといつてよい。そうした視点に立てば、ジャクソン・ポロックからジャスパー・ジョーンズをへて
フランク・ステラまでを、統一のとれた一貫する史的展望のもとにおさめることができる。

論文審査の結果の要旨

現代美術を論じるに際して、第2次大戦後のアメリカ美術を外すことはできない。本論文は、アメリカ現代美術の
成立過程ならびにその意義を問うが、20世紀前半に誕生する近代美術館ことにニューヨーク近代美術館（MoMA）
が果たした美術史上また美術啓蒙上の役割に着目する。立脚した観点は、論の始まりから終わりまで少しもぶれるこ
とがなく、前史にあたる19世紀、中心となる20世紀、さらに21世紀を展望する現代へ、首尾ととのったアメリカ
美術史がみごとに構築されている。

アメリカ現代美術を論じること、その前史を考察すること、MoMAの活動原理を解明すること、そうした各々の試
みは従来もなかったわけではない。しかし、独自の美術史を示唆し美術の普及につとめる美術館活動の帰結という見
かたから、前述3点を総合してアメリカ現代美術史に挑んだ試論はいまだかつて存在しない。論者は、現代美術の蒐
集で日本屈指の美術館に準備段階から長年、勤務してきた。学芸員としての視点と見識が集大成された論文といえる
であろう。

アルフレッド・H・パール・Jr. は、1929年の創設時にMoMAの館長であり、降格されてもなお1967年までMoMA
に在籍しつづけた。その足跡を論者は、さまざまな1次資料、2次文献を駆使して綿密に追ひ、美術館内部の力関係
のなかで、パール・Jr. の活動の実態を浮かびあがらせる。実態解明の手際は、論者の実体験に裏打ちされて説得力
に富み、目から鱗が落ちるような結論が導きだされる。パール・Jr. の開いた二つの展覧会が基になって、アメリカ
固有の主題が、シュールレアリスムと抽象美術、双方から掘り下げられ、抽象表現主義に結実したという論旨は、含
蓄ゆたかな、あたらしいアメリカ美術史を提出している。

かつてないアメリカ現代美術史は構築されたものの、パール・Jr. の思想究明に新鮮味は乏しく、近年の研究成果
が存分に利用されているとはいいいがたい。さらに現代美術を論じる以上、「modern」の概念についても踏みこんだ
解釈を聞きたいところであるが、慎重すぎて、新たな地平を拓くには至っていない。

期待が満たされない憾みは残るが、そうした過剰な期待を抱かせるほど充実しているということである。まぎれも
なく、アメリカ現代美術に関する卓抜な論攷であって、博士（文学）の学位に十分ふさわしいと認定する。